

# いしづみ 良心の碑

## 聖書の言葉

「主において常に喜びなさい。重ねて言います。喜びなさい。あなたがたの広い心がすべての人に知られるようになさい。主はすぐ近くにおられます。どんなことでも、思い煩うのはやめなさい。何事につけ、感謝を込めて祈りと願いをささげ、求めているものを神に打ち明けなさい。そうすれば、あらゆる人知を超える神の平和が、あなたがたの心と考えとをキリスト・イエスによって守るでしょう。」(フィリピの信徒への手紙4章4節から7節)  
この聖句に導かれて受洗しました。それ以来、事ある毎にこの聖句を思い起こし、勇気づけられています。(片桐 陽)

## 10月 講演会

日時 10月13日(金)14時～16時  
講演者 八木橋康広(中部学院大学短期大学部教授・元高梁教会牧師)  
演題 新島精神の淵源を辿る  
新島七五三太と備中松山藩の絆

## 高梁再訪

新島襄は明治13年(1880年)2月、旧備中松山藩の藩都・高梁を訪問し、幕末の「天誅組の乱」に参加して処刑された原田亀太郎の父市十郎に会った。新島は亀太郎のことを「私の旧友」と呼び、市十郎は「死んだ息子に会ったのも同然」と喜んだ。備中松山藩板倉家は新島が属した安中藩板倉家の本家筋である。

## 亀太郎との出会い

亀太郎との初めての出会いは、新島が洋



式軍艦「快風丸」で玉島航海をした時で、二人はたちまち意気投合。しかし、亀太郎は江戸留学中に尊王攘夷思想の影響を受け、主君を裏切る形で「勤王倒幕」に身を投じる決意をしていた。それを告げられた新島の魂は揺り動かされたに違いない。

## 挫折から脱国へ

新島は玉島航海の後、幕府海軍士官への道、勤王の志士への道のいずれにも挫折し、深い精神的危機に陥った。その後、聖書に出会って「天父」の存在を知り、アメリカに渡航する決意を固める。最後に老中板倉勝静を動かし、快風丸で函館に向かい、脱国に成功する。

## 松山藩の精神が同志社に

帰国後に新島は亀太郎の父との再会を通し、もう一度亀太郎の大志をわがものにした。「同志社創立者新島襄」の人格の中には、備中松山藩の師友と幕末維新の「殉教者」の精神性が共有されており、彼らの大

志は新島の人格を通して、同志社をはじめ、明治新時代の青年たちの中に注ぎ込まれていった。

## 新島精神の淵源

「快風丸」に象徴される備中松山藩の人々と新島襄の絆が「新島精神の淵源」を形作っていると信じる。



(文責：福間 幸 写真：木原康博)

## 11月の例会

日時 11月21日(火)午後2時から  
会場 同志社大学東京オフィス  
内容 研究発表  
三瀬安彦『岡山における新島襄のはたらき』  
司会 木原康博 写真 村木文明・江澤 香  
聖書朗読 半田久 祈祷 小崎敬子  
受付 篠塚陽子・夏原知子

群馬新島研究会主催

「青山学院と青山墓地見学会」

集合 11月18日(土)10時30分

青山学院正門

案内人 津田道夫

窓 大学通信で今出川キャンパスの図書館が建て替えられていることを知った。同志社創立150周年の記念行事の一環という。この図書館ができたのは私の卒業後だから、中に入る機会もなかったが、今出川の図書館といえば先代の啓明館を思い出す。

クラーク記念館やハリス理化学館など、重要文化財グループのような華やかさはないものの、大学正門から相国寺門前通りを隔て、アーモスト

館に隣接する登録有形文化財の啓明館は、古武士のような風格を漂わせている。河野仁昭著「キャンパスの年輪 同志社今出川校地」によると、設計はヴォーリズ設計事務所、施工清水組で、大正9年竣工。河野氏は、大学令による同志社大学(大正9年4月開校)のシンボルになったと述べている。

大学紛争がピークを迎えた1969年。私は啓明館の1階にあったアメリカ研究所で授業を受けていた。今出川、新町キャン

パスで大半の建物が学生によって封鎖されていたが、さすがの過激派も図書館までは封鎖しなかった。多くのクラスがレポート提出で済まされた時期での対面式授業だった「米国文化史」演習は貴重な時間で、イエール大学で博士号を取得されたばかりの麻田貞雄助教授の指導は刺激的だった。

講義は土曜日の第1講時。この時間を選んだ理由を尋ねたところ、「いくらでも延長ができるから」が先生の返事だった。

なるほど。研究所の一室だと好きだけ占有できるし、学生も次のクラスはないだろう。先生のこうした語り口が今も耳に残り、啓明館の記憶も蘇ってくる。

新島襄は、キリスト教と立派な教師と図書館の充実こそが同志社のまことの光となるという言葉を残している。数年後に姿を現し、同志社の新しい顔となっていく次代の図書館も、学生たちに忘れがたい思い出をもたらす存在になってほしい。

(福間 幸)